

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長 殿

【授業担当者】

所属/職名： グローバルセンター／特任准教授

氏 名： 森田 豊子

授業科目名	海外異文化体験実習（イスラームの多様性を学ぶ）
研修先	アンカラ大学（トルコ共和国・アンカラ）
研修期間	令和2年2月14日 ～ 令和2年2月25日
<p>[研修の目的・概要]</p> <p>今後グローバルに活躍しようとするれば、現在世界人口の約4分の1を占めようとしているムスリムとの協働が欠かせない。本研修の目的は、①多様なイスラームの現実を知ること、②ムスリムとの共生のあり方を探ることである。ムスリムの暮らしを見て感じ、現地の人々や大学生と対話し、自身の体験を通して学ぶ。その中で①日本の報道からの情報では決して得られない多様な視点を持つこと、②異文化への理解と共感の力を身につけること、③グローバルな視点で考えることを目指す。海外研修を実りあるものにするために、事前学習を十分に行い、インターネットなどを通して英語で書かれた現地新聞などに触れることができるように指導する。自身の関心に応じてテーマを設定し、必要な情報を集めて精査し、発表し、さらにまた調べ、まとめるという作業を行う。</p>	
<p>[研修の成果] *事前学習も含む。地域のグローバル化や活性化に資する人材育成についての成果も記載してください。</p> <p>今回、事前学習においては、アンカラ大学卒業生で現在、本学に在学しているトルコ人留学生に話を聞いたり、スカイプを利用してアンカラ大学の学生と事前に双方向の通信による交流を行うことができた。研修においては、第一にイスタンブールにおいて、オスマン朝の歴史を学んだ。オスマン朝は、第1次世界大戦で崩壊するまで、国内にユダヤ人、アルメニア人、クルド人などの多くの民族を抱えた帝国であり、今回、オスマン朝の遺跡や博物館を見学することによって、帝国時代のトルコの歴史について学ぶことができた。第二に、地中海に面したイズミールにおいては、ギリシア時代から残る遺跡があり、今でもギリシア人住民が残る地域である。トルコというイスラーム教徒が多く住む国内にあるギリシア時代の遺跡が観光資源として丁寧に扱われていることがわかった。第三に、アンカラでは、古代ヒッタイト時代から続くアナトリア文明について学んだ。アンカラ大学との交流では、日本語学科の学生たちに対して、日本や鹿児島を紹介するプレゼンテーションを行った後、女性の働き方など、日本や鹿児島とトルコの文化や社会の違いについてディスカッションを行った。また、アンカラ大学の学生といっしょにアタチュルク廟を訪れたが、現在のトルコ共和国を建設したケマル・パシヤに対して、アンカラ大学の学生たちがいかに今でも尊敬の念をいただいているのか、トルコのアイデンティティを語る上で、アタチュルクの功績がいかに重要なかがわかった。アンカラ大学の日本語学科の学生の中には、以前、鹿児島大学に留学していた学生もおり、これからも活発な交流を続けることを約束できた。アンカラ滞在中、日帰りでコンヤを訪れたが、この町では、トルコで息づくイスラームの歴史と現状についてよりよく理解することができた。というのも、コンヤでは13世紀頃最盛期を迎える、ルーミーを祖とするメブラーナ教団の拠点があり、現在でもイスラームを強く信仰している人たちが多くいる。これまでイスタンブールやアンカラなどの大都市との比較の視点を獲得することができた。アンカラ最終日には、シリア難民で現在アンカラ在住のクルド人の方からお話を聞き、彼らの現状について理解することができた。以上のように、三つの都市を回ることによって、トルコの多面性を理解することができ、それぞれの都市におけるイスラームの多様なあり方を深く理解できたと思う。</p>	
<p>[今後の課題]</p> <p>本学におけるトルコ研修は今回が初めてであり、時間配分や都市間の移動などにおいて、もっと効率よくできたのではないかとと思われるところがあった。また、事前学習の時間が十分とれず、トルコについての歴史や文化、言語についての知識が学生によってばらばらになってしまった感があった。今後の反省点だと思う。本学には、毎年アンカラ大学からの留学生がいるので、事前学習では、彼らとの交流をもっと行い、トルコを知ろうとするインセンティブにするべきであった。ただし、今回のアンカラ大学との学生との交流によって、アンカラ大学でも鹿児島大学にきたいという学生が増えたという報告を受け、今後の活発な交流が期待できる。研修の時の一時的な交流にとどまらない、学生にとっても一生続くような友情を育むことができるように、サポートしていきたい。</p>	